

### I 概要

**目的：** オープンアクセスとデータ駆動型研究の推進、教育のデジタル・トランスフォーメーションに即した機能を有する「デジタル・ライブラリー」の2030年までの実現に向けて、オープンアクセス（OA）推進の観点から、大学図書館の今後の可能性や展開、意欲的な将来像を探り、今後、大学図書館はどのような方向に進んでいけばよいか、具体的にどのようなアクションを取ればよいか、合宿形式で検討・議論を深める。

**日時：** 令和6年8月30日（金）～9月1日（日）

**場所：** 湘南国際村センター（神奈川県三浦郡葉山町上山口1560-39）

**参加者：** 募集期間 令和6年6月27日（木）～7月12日（金）  
要件 国公立大学、大学共同利用機関に勤務している係長以下の図書系職員（常勤）のうち、40歳程度までの者。

経験年数	所属	所属				合計
		国立大学	公立大学	私立大学	大学共同利用機関	
5年未満		11	0	4	0	15
5年以上10年未満		13	0	1	1	15
10年以上15年未満		7	0	1	1	9
15年以上		4	0	0	0	4
合計		35	0	6	2	43

○男女比 ほぼ1対1

○職階別比 係長・主任クラスと係員クラスがほぼ1対1

○地域別参加者数 北海道・東北4名、関東18名、中部5名、近畿5名、中国・四国5名、九州・沖縄6名

<b>講師等：</b>	大山 努	東京大学附属図書館事務部長
	菊谷 智史*	大阪大学附属図書館箕面図書館課外国学図書館班管理・学術情報整備担当
	金藤 伴成	京都大学附属図書館総務課長
	小山 憲司	中央大学文学部教授
	杉田 茂樹	京都大学附属図書館事務部長
	竹内 比呂也	千葉大学副学長（教育改革・学修支援）、附属図書館長、アカデミック・リンク・センター長、大学院人文科学研究院教授
	立原 ゆり*	東京大学附属図書館総務課企画渉外チーム係長
	西岡 千文	京都大学情報環境機構データ運用支援基盤センター准教授
	林 和弘	文部科学省科学技術・学術政策研究所上席フェロー、データ解析政策研究室長
	日向 良和	都留文科大学大学長補佐、共通教育センター長
	* 兼参加者	

(五十音順)

- 進め方：**① 事前課題として、
1. 自己紹介シートの作成
  2. 所属機関のOAや大学図書館に関する方針・施策等の現状・課題について概要作成
  3. 以下の文献等の通読・内容等の把握
    - ・ オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方について（審議まとめ）
    - ・ オープンサイエンスの時代にふさわしい「デジタル・ライブラリー」の実現に向けて～2030年に向けた大学図書館のロードマップ～
    - ・ 「2030デジタル・ライブラリー」推進に向けたロードマップ
    - ・ 新しい「デジタル・ライブラリー」の実現に向けて検討すべき課題
- ① 参加者43名を8つのグループに分け（5～6名/グループ）、各グループで大学図書館の主な利用者である学生と教員・研究者の、2030年におけるペルソナ（架空の利用者像）を設定。
- ② 設定したペルソナに対して、「2030デジタル・ライブラリー」推進に向けたロードマップの
- 【1】 支援機能・サービス（コンテンツのデジタル化とオープンアクセス）
  - 【2】 場としての大学図書館
  - 【3】 人材
- についてグループディスカッションを行い、結果を最終日に発表。

## プログラム：

1日目：8月30日（金）

時間	内容
13:45～14:00	受付
14:15～14:15	オリエンテーション
14:15～14:45	合宿の趣旨説明 議論の方向性及びロードマップの概要説明
14:50～15:25	自己紹介
15:35～16:30	グループディスカッション ○ 事前課題をもとに2030年の大学図書館利用者のペルソナについて共有 ○ 各グループのペルソナ設定
16:40～17:10	OAに関する海外訪問調査報告①（スウェーデン）
17:10～17:35	グループディスカッション ○ 各グループのペルソナ設定
17:35～17:55	参加者同士による各グループのペルソナ案の講評
18:00～18:05	事務連絡
18:30～	夕食

2日目：8月31日（土）

時間	内容
～ 9:00	朝食・集合
9:00～ 9:05	事務連絡
9:05～ 9:30	2日目のプログラム概要説明 ライブラリー・スキーマの概要説明
9:30～10:20	ライブラリー・スキーマ作成事例紹介 ○ 東京大学 ○ 京阪神（京都大学・大阪大学・神戸大学）
10:30～12:00	グループディスカッション
12:00～13:00	昼食
13:05～14:05	グループディスカッション
14:15～14:20	発表に向けた事前説明
14:20～17:40	発表資料作成
17:40～18:00	総括
18:00～18:15	事務連絡・写真撮影
18:30～	夕食 OAに関する海外訪問調査報告②（シンガポール・スイス・アメリカ）

3日目：9月1日（日）

時間	内容
～ 8:30	朝食・集合
8:30～ 8:35	事務連絡
8:40～ 9:40	成果発表①
9:50～10:50	成果発表②
10:50～11:40	講評・総括
11:45～12:00	事務連絡等
12:00	解散



## Ⅱ グループディスカッションの試行的まとめ

### (1-1) ペルソナの設定 ～ 学生ペルソナ

1

- 学部2年生。日本史（中世～近世）専攻。学芸員資格勉強中。
- 城・刀・甲冑オタク（国内の城をほぼ制覇）。
- ショート動画を見がち、わからないことは生成AIに聞く習慣がある。
- 情報リテラシー教育も習ったが、AIのレコメンドは基本信頼。
- 文献は全文検索して必要なところだけ読めればいい。
- 史料はデジタル、歴史小説は紙派。
- 図書館は学習スペースとして主に使う。
- (図書館) 職員には話しかけづらいので笑顔で対応してほしい。

2

- 学部2年生または3年生。資格取得に追い立てられた勉学。
- 卒業までに、就活に直結する資格が必要。大学での学習はほぼ全てを資格取得のために充てる。
- 同じ資格取得を目指している同級生・友人とグループ学習をする機会も多い。
- 将来的な安定を志向（“AIに代替されない職”に就きたい）。少しでも好待遇・好条件の就職先に強い関心。
- 勉強はデジタルで完結、紙を使うことはほとんど無い。デジタル教材には大学入学前から慣れ親しんでいる世代。資格取得教材もデジタル教材やアプリが一般的で、それ以外のコンテンツには関心がない。
- SNSにも親しんでおり、情報収集をSNSで幅広く行っている。
- タイムパフォーマンス・コストパフォーマンスの重視。
- リアル空間とバーチャル空間の併用：コミュニケーションを伴う活動においては分け隔てなく利用（デジタル多重人格も）。必ずしもバーチャル空間優位ではなく、リアル空間での交流を選択することも多い。
- 経済的な余裕があまり無く、空いている時間はアルバイトをしていることが多い。

## (1-1) ペルソナの設定 ～ 学生ペルソナ

3	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 経済学部3年生（夏）。</li><li>・ 大学入学後に聴覚障害を得る。</li><li>・ デジタルネイティブ世代（生成AIネイティブ）。</li><li>・ 高校で探究学習を行った経験がある。</li><li>・ 図書館の想定利用シーン：課題図書を案内されたときはレポート用の本を借りる（＝それ以外はあまり借りない）、ゼミの人とのディスカッション。</li></ul>
4	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 経済学部1年生、男子。夏休み明けで、大学に来るのは週2～3日。課外活動はボランティア（就活対策）。趣味は株。</li><li>・ メンタル：「繊細さん」。不便なことに敏感（ex. eBookのDL、ILL）。ただ便利なものもあえて試さないし、自分ではできると自認。対面も嫌じゃないが、人に聞けない、失敗を嫌う。主張はする、プレゼンも得意でSNS好き。</li><li>・ 検索行動：コスパ重視。生成AIで検索が第一、わからなければ追求しない、一次資料は読み込まない。教員からの指定があった文献は読む。</li><li>・ 学習スタイル：デジタルネイティブ。インターネットで検索して学習することに慣れている（と自認）、できればスマホで全部したい。端末で教科書や本に書き込みたい。本は聞く派。長い動画は見れない。</li><li>・ 図書館の使い方：施設。グループワークエリアetc.は使用する。個人ブースは就活やオンライン授業のため利用したい。</li></ul>

### 共通点 学生ペルソナの

- 学習や情報収集においてデジタルツール、特にAIやインターネット検索を積極的に利用する傾向
- コストパフォーマンスやタイムパフォーマンスといった効率性を重要視
- 学習や諸活動において、個人・グループを問わずリアルな場所としての図書館も利用
- 資格取得、就職活動、専門分野の探求、大学での課題といった、具体的な目標を持って活動

## (1-2) ペルソナの設定 ～ 研究者ペルソナ

1	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 国立の総合大学（研究大学）の助教（任期付）40歳。</li><li>・ 分野：歴史学（東洋史）。個人予算は小規模。</li><li>・ 他大学の非常勤講師も兼務。</li><li>・ 海外のデータベースをよく使う。</li><li>・ 成果発表：中国語や日本語の論文が中心。これまでの論文を書籍にまとめたい。</li></ul>
2	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 社会学の准教授（テニユア）40代、科研費を獲得しており共同研究も盛ん。</li></ul> <p>&lt;教育&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 社会学・統計学専門基礎科目はメディア（オンデマンドやオンライン）授業中心、ゼミは対面。データサイエンス教育など、学内ワーキング業務も担う。</li></ul> <p>&lt;研究&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 紙媒体、デジタル資料を活用。</li><li>・ 研究データ管理・公開に関し、インタビュー調査のトランスクリプトを匿名化して共有。ポリシーや申請手順が多岐に渡り、わかりにくいのが悩み。</li><li>・ 研究には統計ソフトを活用している。</li><li>・ 研究成果の生産：論文は国内学会専門誌（紙・電子）、紀要などに投稿しているため、APCの高騰に関しては直接関係がないと考えている。</li><li>・ 自身の評価には単行本出版も重視される。</li></ul>
3	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 附置研究所の30代若手研究者。従来の図書館ではサービス対象から抜け落ちてしまいがち。講義・学生指導などの教育の努力は低い。</li><li>・ キャリア観：帰属意識が薄い。他に良い環境があれば転職しても良いと考えている。</li><li>・ 必要な論文はすぐに電子ジャーナルで読みたい。大学で読めない論文はILLを使ってまで取り寄せたいとは思わない。</li><li>・ 論文投稿においては、予算の中で成果の最大化を望む。非OA誌の方が自分の業績に有利なら、迷わず非OAを選択。OA誌も自分の業績に有利なら使いたいが、APC対パフォーマンス（被引用数）を最大化させたい。</li></ul>

## (1-2) ペルソナの設定 ～ 研究者ペルソナ

4

- 30代前半・男性、経済学専攻。現在任期付きで本採用を目指している。
- 国際的な共同研究がしたい。
- 授業準備の時間を短縮したい。
- ハゲタカジャーナルの知識・研究倫理は知ってはいるが、実践できていない。
- 論文・資料はOAで利用したい。
- 研究費が少なく、ゴールドOAにはできない（グリーンOAはよく知らない）。
- 論文は自分で執筆し、海外ジャーナルに投稿。
- 生成AIは論文要約・文章校正・英訳で使用。
- タイパ・コスパ重視。

の  
共通点  
研究者  
ペルソナ

- キャリア形成・安定性への強い関心
- 研究成果の発表における多様なフォーマットへの関心
- オープンアクセス（OA）への関心は高いが、知識が不十分
- 研究資源への即時アクセスを重視する傾向

## (2-1) 学生ペルソナに対する「支援機能・サービス」

1	<ul style="list-style-type: none"><li>AIを活用したディスカバリーサービス：閲覧可能なデジタルアーカイブの全文検索</li><li>新たなレファレンスシステムの整備：海外大学との連携による24時間対応・AIサポート・メタバースの活用</li><li>ロボットを活用したスピード重視のILL連携</li><li>新たなマイブラリーの構築：履修状況との連携によるレコメンド機能、閲覧履歴に基づく現物、デジタルの適切な引用管理システム</li><li>生成AI・IT・機材・ソフトウェア・ツールの使用方法に関する講習、リテラシー強化、ライティングサポート</li></ul>
2	<ul style="list-style-type: none"><li>コンテンツポータル提供（コンテンツの作成）</li><li>図書館資料の即時電子化サービス</li><li>調査にコストがかかるキャリア情報の提供</li><li>就業後、卒業後を見据えたトレーニングと情報提供</li><li>デジタル空間へアクセスできるデバイスの提供</li><li>学習コンテンツのAIによるレコメンド</li><li>AI試験管による模擬試験</li></ul>
3	<ul style="list-style-type: none"><li>AIチャットボットによる案内</li><li>生成AI等を含めた調べものツールの使い分け</li></ul>
4	<ul style="list-style-type: none"><li>使いやすい検索システム（自然言語・音声入力対応）</li><li>コンテンツの電子化</li><li>学習アウトプットの作成セミナー。教員との協働や学務システムとの連携</li><li>ツールの紹介・広報。同じ分野のピアサポート</li></ul>



### 共通点

- 人工知能（AI）やIT技術を利用した情報検索、学習支援、サービス提供
- デジタル化されたコンテンツ（資料）と、それを利用するための学習環境・システムの充実
- 個別最適化された統合的なサポート

## (2-2) 研究者ペルソナに対する「支援機能・サービス」

1	<ul style="list-style-type: none"><li>OA書籍出版の充実</li><li>自作DBを公開できる環境</li><li>デジタル化の拡大・メタデータの充実化</li></ul>
2	<ul style="list-style-type: none"><li>利用しやすいILLサービスの実現や資料のデジタル化</li><li>次世代AI OPACによる資料の入手支援</li><li>電子ブックサブスクサービスの導入（電子ブックの受け入れ基準の明確化）</li><li>研究データ管理（RDM）関連FD研修、リテラシー教育、DMP作成支援</li></ul>
3	<ul style="list-style-type: none"><li>投稿支援AIシステム。著者最終稿の本文データをAIで解析し、投稿先ジャーナル比較・推薦。所属機関のAPC支援やデータ管理、リポジトリ情報の表示。</li></ul>
4	<ul style="list-style-type: none"><li>バーチャル空間上の統合的なインターフェース。研究支援が1つのサービスで完結。chatbot、AI案内人のような24時間自動対応。授業支援：授業関連資料や授業動画を機関リポジトリで共有。授業支援：教員（資料・動画作成者）向け著作権等講習会。国内全機関の情報を全文検索可能なディスカバリーサービス。</li></ul>



### 共通点

- デジタル・コンテンツの拡大とアクセス性の向上
- AIを活用した研究支援・サービス完結の実現
- 研究データ管理（RDM）と公開・活用環境の整備

## (3-1) 学生ペルソナに対する「場」

1	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 飲食可能な作業スペースの整備・拡充</li><li>・ オンライン授業や次週、オンライン面接など一人（少人数）で使用できるスペースの整備</li><li>・ オンライン会議にも対応可能な機器を備えたグループ学習のためのスペースの拡充</li><li>・ アバターを使った会議やレファレンスを行うことのできるメタバース空間の整備</li><li>・ 3Dプリンター、撮影機材等を備えたものづくりの場の整備</li><li>・ 高性能PCや大型ディスプレイ、画像編集ソフトなど個人で用意が難しい機器の提供</li><li>・ VR機器などで仮想現実を体験できる機器の整備</li></ul>
2	<ul style="list-style-type: none"><li>・ リアルの場として、図書館の強みをさらに伸ばした学習空間。快適な設備：電源、ネット接続、什器、空調、照明etc. 雰囲気：学習する学生が集う音の環境（完全サイレント～会話OKまでエリア分け） → 自宅にもカフェにもない強みを伸ばしつつ多様なニーズに対応</li><li>・ バーチャルの場として、大学図書館バーチャルプラットフォーム。コンテンツポータル、図書館職員、教員につながり、自宅にいる友人、同じ目標を志す他大学の学生と一緒に学習や情報共有 → 見かけ上は自習でも、心強い情報があり、仲間がいるような環境の提供</li></ul>
3	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 物理的な場にインターフェースを設置。グループワークの席などにファミレスの注文タブレットを配置。AIチャットボットに席からアクセス可能。呼び出して図書館員やその他部署とテキストチャットや通話が可能</li></ul>
4	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 授業に関する情報をワンストップで管理できるポータルサイト</li><li>・ グループワーク・自習の場</li><li>・ プレゼン練習の場（採点・フィードバック・録画機能のある個室ブース）</li></ul>



### 共通点

- 学習目的や形態に合わせた物理的な学習スペースの多様化と機能強化
- リアルとバーチャルを統合したシームレスな「学習環境」の構築
- 学習・情報・支援へのアクセスのワンストップ化

## (3-2) 研究者ペルソナに対する「場」

1	<ul style="list-style-type: none"><li>多機能で創造的なメディアスペースの充実。研究成果の発表。オンライン授業・オンデマンド授業の配信（収録、編集）の支援がオールインワンで出来る。複数の機関で共同利用出来る。学生のデジタル格差解消（専用機器の提供や、基本操作に対するインストラクション）。スキャナー、3Dプリンター、3Dスキャナー、レーザカッターなどのメーカー機器、編集用ソフトウェア。専門分野に特化した図書館オリエンテーション。</li></ul>
2	<ul style="list-style-type: none"><li>バーチャル空間でのブラウジングサービス</li><li>超高速学内便ドローン</li><li>ラーニングコモンズの拡張。VR・オンライン会議、部屋同士をつなぐ。360度ホワイトボード。VRゴーグルの貸出</li><li>無人開館拡張（AIロボット対応）</li></ul>
3	<ul style="list-style-type: none"><li>オープンでバーチャルなアカデミックの「島」。AI技術を活用した最適化と組織横断で協力して、成果を最大化。物理的な制約を超えた、学術コミュニケーションのバーチャル空間</li></ul>
4	<ul style="list-style-type: none"><li>（再掲）バーチャル空間上の統合的なインターフェース。研究支援が1つのサービスで完結。chatbot、AI案内人のような24時間自動対応</li></ul>



### 共通点

- VR（仮想現実）やメタバースといったバーチャル（仮想空間）技術の積極的な活用
- 研究・教育活動を支援する物理的なスペースと専門機器の充実・高度化
- AI・自動化技術によるサービス提供のシームレス化

## (4-1) 学生ペルソナに対する「人材」

1	<ul style="list-style-type: none"><li>他大学とのレファレンス連携のためのコミュニティ構築（公共図書館や海外連携も含む）</li><li>生成AIに適切な質問を行う能力（プロンプトスキル）</li><li>IT機器・機材の専門知識</li><li>資料入手を簡便にするために必要な法律（特に著作権法）、制度設計、契約を行う技能</li><li>サイエンスコミュニケーターやキャリアサポーターといった、学生の自己実現を補助する技能</li><li>文献管理ツールの使用方法に関する知識</li><li>動画作成のスキル（YouTuber、VTuberの採用）</li></ul>
2	<ul style="list-style-type: none"><li>キャリアサポーター：就活・資格取得に関する情報を提供</li><li>学術コンテンツクリエイター：図書館から発信するコンテンツを動画で作成し、いつでもどこでも見られるように整備</li><li>著作権専門員：所蔵資料の電子化に係る権利処理を実施</li><li>学術コンテンツキュレーター：学生のニーズに応じて、役立つコンテンツを案内</li></ul>
3	<ul style="list-style-type: none"><li>学務系の知識を有した人材。自大学の教育方針や大学の学務業務を熟知している。自大学にローカライズされた知識が必要なため、各大学に一人は必要</li><li>図書館系IT人材。AIなど最新の知識習得が可能な人材。デザインや動画制作などコンテンツクリエイター。一つの図書館に一人である必要はなく、クロスアポイントメント可能</li></ul>
4	<ul style="list-style-type: none"><li>教育コーディネータとの連携</li><li>高大接続に詳しい人材</li><li>著作権・ライセンスに詳しい人材</li><li>学習アウトプット作成セミナー</li><li>ツールの紹介・広報の講師役</li></ul>



### 共通点

- デジタル・コンテンツ制作とリテラシー教育に関する専門性
- 著作権・契約・法律に関する専門知識
- 学内・外のステークホルダーと連携し、学生の学修やキャリア形成を総合的にサポートする能力

## (4-2) 研究者ペルソナに対する「人材」

1	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 共同研究支援</li><li>・ 大学出版会などと協働して、研究者と出版社を繋げることができる</li><li>・ さまざまな評価指標の紹介や、それぞれのメリットデメリットの概要を説明出来る</li><li>・ (機関を越えた) 教材作成支援</li><li>・ (機関を超えた) 機器に対するインストラクションが出来る人材</li><li>・ 情報リテラシー教育を提供</li></ul>
2	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 出版社との交渉/交渉力 (サブスク・紙書籍のエンバーゴに係わる部分)</li><li>・ ドローン開発・操作 (業務委託・企業連携)</li><li>・ 客員ライブラリアン (研究職: AI、研究データ管理、著作権、FD)</li><li>・ 学内FA制度 (研究推進や情報管理系部署との人事交流や異動)</li></ul>
3	<ul style="list-style-type: none"><li>・ コンサルライブラリアン法人の設立。全国の大学・研究機関を対象に研究者を支援。成果を最大化しうる論文の投稿先、論文のOA化、研究データ管理等の研究サイクル全体を支援</li></ul>
4	<ul style="list-style-type: none"><li>・ (再掲) バーチャル空間上の統合的なインターフェース。研究支援が1つのサービスで完結。chatbot、AI案内人のような24時間自動対応</li></ul>



- 共通点**
- 研究サイクル全体を支援する高度な専門知識
  - 組織・機関を越えた連携・協働の推進に対応できるスキル

## (5-1) 示唆される今後の方向性

の者学生  
共ペル・  
通ル・研  
点ソナ  
究

- デジタルツールとテクノロジーの積極的利用
- 即時的な情報アクセスへの高い要求
- 外部環境（資格・キャリア）に紐づいた活動目的



・支援機能  
サービス

- コンテンツのデジタル化と、それを横断的に検索・発見できる統合的な検索システム（ディスカバリーサービス等）の強化
- 個々の状況（学習状況、研究プロセス、キャリア）に合わせたパーソナライズされたサービスや、複数のサービスや手続きをシームレスに連携し、ワンストップで完結できるサービス・機能
- 最新技術や研究活動、学習に必要なツールや法的な知識（著作権、RDMなど）に関する教育・講習・トレーニングを通じたリテラシー強化支援
- 研究成果・学習アウトプットの管理・活用基盤

場

- 物理的な場（図書館、学習スペース）と仮想的な場（メタバース、オンラインプラットフォーム）をシームレスに連携・統合した環境
- 個別利用（オンライン会議、面接）や協働学習・研究活動（グループワーク、授業配信、成果発表）に対応できる物理的なスペースの多様化と機能強化
- 専門的な機器（高性能PC、VR機器、3Dプリンター、撮影機材など）や専門ソフトウェアの整備・提供
- AI・自動化技術による、いつでも、どこからでもワンストップでアクセス可能なサービスの提供

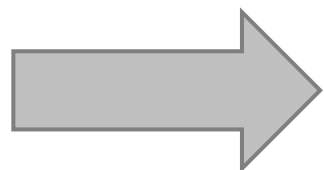
人材

- AI（生成AI）、IT機器・機材、コンテンツ制作（動画・デザイン）といった最新のデジタル技術とコンテンツに関する専門的な知識やスキル
- 著作権法、制度設計、契約、ライセンスといった法務的側面に対応できる高度な専門知識
- 学内外のステークホルダー（他大学、出版社、学務系部署など）と効果的に連携・折衝し、サービスを構築・提供できる能力
- 学生の学習アウトプットや研究者の研究成果を最大化するために、教育・指導（リテラシー教育）や、個別具体的なコンサルティングを行うスキル

## (5-2) 意欲的な将来像のアイデア【各グループの検討成果から抜粋】

支援機能 サービス	<ul style="list-style-type: none"><li>○ シン・レファレンスシステム：人材連携による24時間対応・AIサポート・メタバースの活用</li><li>○ バーチャル空間でのブラウジングサービス</li><li>○ コンテンツポータル提供、図書館資料の即時電子化サービス</li><li>○ AI試験管による模擬試験（就職のための資格試験勉強支援）</li><li>○ 論文投稿支援AIシステム（著者最終稿の本文データをAIで解析し、投稿先ジャーナル比較・推薦を行うWebサイト）</li><li>○ 生成AI Chatbot型レファレンスサービス</li><li>○ バーチャル空間上の統合的なインターフェース</li></ul>
場	<ul style="list-style-type: none"><li>○ アバターを使った会議やレファレンスを行うことのできるメタバース空間</li><li>○ 大学図書館バーチャルプラットフォーム</li><li>○ どこでも、誰でもラーニングコモンズ拡張・連携</li><li>○ いつでも無人開館（夜間・時間貸し）</li></ul>
人材	<ul style="list-style-type: none"><li>○ 他大学とのレファレンス連携のためのコミュニティ構築（公共図書館や海外連携も含む）</li><li>○ 生成AIに適切な質問を行う能力（プロンプトスキル）</li><li>○ キャリアサポーター、学術コンテンツクリエイター、著作権専門員、学術コンテンツキュレーター</li><li>○ 全国の研究機関を対象に研究者を支援するコンサルライブラリアン法人</li></ul>

各グループの議論の成果はNIIリポジトリにて公開



<https://repository.nii.ac.jp/records/2001950>

### Ⅲ フォローアップ アンケート調査

**目 的**：湘南リゾート実施後の参加者の行動および意識の変容や、オープンアクセスなどをはじめとした「2030デジタル・ライブラリー」についての考えなどを把握する。

**対 象**：参加者43名

**調査方法**：Microsoft Formsを利用したオンラインアンケート形式

**回答期間**：令和7年10月17日（金）～令和7年11月5日（水）

**回答数**： 35名 （回答率：81.4%）



(1-1) 湘南リトリートへの参加をきっかけとして、他の参加者や所属組織の内外で新たにコミュニケーションをとるようになった者の有無及び属性

計 (%)				
有	25 (71.4%)	}	リトリート参加者	25
無	10 (28.6%)		リトリート講師陣 (有識者)	4
計	35 (100.0%)		所属組織の他部署の職員	3
			所属組織の教員・研究者等	1
			外部の職員 (リトリート参加者でない)	3
			外部の教員・研究者等 (リトリート参加者・講師陣でない)	1
			その他	0

注) 複数回答あり

(1-2) コミュニケーションの内容 (複数回答あり)

	計
リトリートの内容に関する意見交換・相談	24
・「2030デジタル・ライブラリー」 (ロードマップ等含む)	2
・コンテンツのデジタル化	1
・オープンアクセス、オープンサイエンス	7
・ライブラリー・スキーマ	4
・人材育成やスキル	1
・大学図書館の今後の利用者像やアクションプラン	1
・海外の調査報告事例	2
・AI等の情報技術	5
・その他	1
業務に関する依頼 (例: イベントへの登壇等)	4
業務に関する意見交換・相談・連携協力等	20
その他 (私的交流等含む)	2

(2-1) リトリート参加後、所属機関内での報告等の実施状況

	計 (%)
実施した	25 (71.4%)
実施していない	10 (28.6%)
計	35 (100.0%)

(2-2) リトリート参加後、所属機関内での報告等のほかに自ら企画／行動した事項の有無及びその内容

	計 (%)
有	14 (40.0%)
無	21 (60.0%)
計	35 (100.0%)



	回答数
大学図書館の関係委員会等への参画 (例：JPCOAR)	4
所属機関内での企画の立案 (勉強会、説明会等)	7
文献執筆	2
関係資格等の取得 (進行中含む)	5
大学等での学修	3
教員や事務職員等との連携協力体制の構築	1
その他	2

注) 複数回答あり

## (3-1) リトリート参加による意識の変化

### 自己の視野・意識の広がり

- 他大学の図書館職員の方と意見交換したことで、広い視野で取り組み、学内の意見のみに囚われないよう意識するようになりました。
- 学内の目の前の業務だけではなく、大学図書館界全体の諸課題や将来ビジョン（自館に影響がある部分を含む）について目を向けることができるようになった。
- これまでは自分の業務を中心に1~2年後に目を向ける程度でしたが、リトリートに参加して大学図書館の在り方や将来を考えたり、政府の政策動向に注意を向けたりする時間が増えたように思います。また、全国に頼れる「仲間」がいると実感しました。
- より一層、国としての図書館の方向性を意識するようになりました。また、従来の業務にとらわれない考え方が大事だと思うようになりました。
- 自館での日常業務だけを考えるのではなく、大学図書館全体のこと、5年後のことが意識に入るようになり、視野が広がったと感じます。また、大学図書館がそれ単独で活動しているのではなく、文部科学省など大学外の組織との連携も踏まえたうえで日本の学術情報流通を考える必要があることを意識するようになりました。
- 今後ますます利用者が多様化するであろうことをあらためて意識し、サービスをただ高度化・デジタル化すればよいわけではなく、利用者の特性や利用行動にマッチしたサービス構築を行う必要があることに注意を払うようになった。
- 業務効率化やAIの活用への意識が高まりました。

- 全国的な関係委員会等で、微力でも貢献できれば、という気持ちが高まりました。また、利用者の解像度を上げる意識が高まりました。
- リトリートに参加したことで、自らの知識や経験の不足を痛感し、学内外の活動について機会があれば挑戦する意識を持つようになりました。
- 自分の所属する図書館・大学に限定して考えるのではなく、日本の大学図書館全体で動きを作っていくことの重要性を実感しました。また、他大学の方との知見の共有にさらに価値を見出すようになりました。

### 当事者意識の芽生え

- 自身らが2030年あるいはその先の大学図書館を作り上げていくということについて、より切迫感をもって意識するようになった。
- 学術情報に関わることに對して、より積極的に考えるようになりました。
- 図書館の未来像といった大きなテーマについて、「上の人たちが考えること」ではなく、自分が職員としても利用者としても携わることになる自分事としての意識が強くなったように思う。
- 内閣府や文科省などが作成する指針を待つのではなく、主体的に大学図書館全体にとって良い形とはどんなものか、考えるようになった。
- 内閣府や文部科学省の施策や方針が身近なものになった。
- オープンアクセスに限らず、今後の図書館の在り方について考えるようになった。

- 業務の将来像について検討する中で、ひとつの区切り・段階として2030年を想定して、具体的な段階を考えることが増えた

### モチベーションの維持・増進

- 同じ班の参加者との対話や他の班の発表を聞いて、勉強熱心で意欲的な方が多く、学ぶことに対するモチベーションが高まった。また、大学図書館界の未来は明るいと思えるようになった。
- 特に意識に変化はないがモチベーションは高まったように思います。
- リトリートに参加していたのは将来に関する議論に前向きな方ばかりだったので、この業界の未来は明るいなと思えました。それによって、自分も新しいことに挑戦したいという気持ちが強くなり、またそれを口にする事の大切さも思い出した気がします。もっとこの業界を面白く、魅力的なものにしたい、楽しく仕事をしたい、そしてそれができそう、という気持ちになりました。
- 各機関の意欲のある方と交流できたことは刺激になり、日々の業務に生きています。
- 出張を伴う研修は久しぶりで刺激的でした。夜中まで集まって時間のある限り話し合う機会も本当に徐々に、プロジェクトの立ち上げ期あるいは学生時代を思い起しました。日々をやり過ぎばかりになっていた自分にも、まだここでやりたい・面白がりたいことがあったと発見できました。
- 全国に意識の高い大学図書館員がこんなにたくさんおられるのだと実感しました。勉強を続けたいと思いました。

- これまで以上に「大学の一職員」という枠を超えて、多職種の教職員と共に仕事をすることが必要だと考えるようになりました。また、個人的な面では、研究者支援を見据えて大学院（修士課程）への修学を開始しました。このほかに、業務改善のためにローコードツールによるアプリケーション開発を学びはじめました。応用できそうなものは色々と使ってみようと考えています。

### 他者・他部署との連携

- これまでは、図書館のなかでの仕事や役割を考えることの方が多かったですが、大学の一部署としての役割を考えるようになりました。リトリートで他大学の取り組みを聞いたことや、即時OA対応・研究データ管理といった大学全体で取り組む必要があるものが増えてきたこともあり、他の部署との協力や教員への働きかけが今まで以上に必要だと感じ、大学全体を意識して仕事に取り組むようになったと思います。
- これまで以上に「大学の一職員」という枠を超えて、多職種の教職員と共に仕事をすることが必要だと考えるようになりました。また、個人的な面では、研究者支援を見据えて大学院（修士課程）への修学を開始しました。このほかに、業務改善のためにローコードツールによるアプリケーション開発を学びはじめました。応用できそうなものは色々と使ってみようと考えています。【再掲】

- リトリート参加までは本業が研究IRであったため、図書館内の問題について遠目に見ているような立ち位置であったが、リトリート後にはいくつかの問題に対して参加しやすくなった。図書館は他部署・他部局からすれば壁のある組織であり、立ち入りにくいイメージがあったが、リトリート後にはそれらは無くなった。
- 自分の所属する図書館・大学に限定して考えるのではなく、日本の大学図書館全体で動きを作っていくことの重要性を実感しました。また、他大学の方との知見の共有にさらに価値を見出すようになりました。【再掲】
- リトリートだけが理由ではないが、やはり関連部署やURAとは積極的に連携を取っていかねばいけないという意識が強まった。目の前のことをこなしていくことが多いが、遠くない未来の変化やそのとき求められるものを想像して、備えておく必要性の認識。
- 参加を通じて、（自機関のみならず）他機関の方々も、様々な課題や不安を抱えていらっしゃることが分かりました。そのため、機関の垣根をこえて取り組む重要性を、さらに認識するように変化しました。

### 積極的な情報収集

- 他機関の取り組みについても積極的に情報収集し、自館の取り組みに活かさないかを考える機会が増えた。
- 学内の動きだけではなく、他大学の活動や政策動向、国際的な動きにもアンテナを張るようになった。
- 情報収集の重要性を痛感しています。

### 変化なし／懸念等

- 特に変化はありません。引き続きやる気満々です。
- 本学職員としては特に大きな変化はありません。現在の大学の環境・ポジションにおいては、取り付く島が見つけにくいという印象は受けています。
- 所属の現在の体制や業務内容で行っていくことへの不安
- 変化は無い。リトリート以前から抱いていた疑問や考えていた問題への認識は、リトリートでも全く解消されなかった（概ね、理念的なこと、政策的なことへの対応について、その前提の是非などの検討を行うプロセスが存在せず、盲従と言うべきような状態が当然のようになっているという業界的な雰囲気への疑問）。ディスカッションで話し合ったことを含めた未来像なども、結局のところ、大学組織の体制（数年単位の人事異動、人員削減、旧態依然とした労務管理や組織構成など）の変化がなければ不可能という、従来と変わらない結論に帰着するだけだとしか思えなかった。

## (3-2) リトリートが有意義だった点

### 人的ネットワークの構築・拡大

- 様々な大学図書館の方と知り合うことができたため、関連イベントで会うことがあれば簡単に情報交換ができるようになった。また、講師陣の先生方にも名前を知ってもらえたことも影響が大きいと感じる。(先生方は様々な委員でもあるため、色々な場面でお話できる機会が増えた)
- 最も有意義であると感じているのは、「人的ネットワークがひろがった」点です。深いコミュニケーションをとっているわけではございませんが、お会いした際、少なくとも、ご挨拶する関係性は築けました。
- 普段は接する機会のない他大学の職員の方とのつながりができた。また、班で考えたことに対して、講師の先生方から直接アドバイスや意見を伺えたのは貴重な経験だった。
- 不確かな将来のことを考えることは難しいが必須のことでもあるので、現在取り組んでいる将来構想に関する議論の中などで直接的に役立っている。また、業務内外を問わず、(現在のところ単発ではあるが)相談や依頼、質問などできる対象が増えたこともありがたかった。
- 他大学の方とのネットワークが広がったこと。
- 実際に会って話して顔のわかる人が増えたこと(何かあったときに相談しやすい)。また、リトリートをきっかけに学外の協力組織にも参加することになり、業務の幅が広がったこと。
- 図書館関連のセミナー・イベント参加時に、気軽に意見交換や交流ができる「顔見知り」が増えた点。

- 元々JPCOARに参加していて全国の知り合いを増やしつつあるところだったが、リトリートをきっかけにJPCOARの内外で知り合い(または一方的に知っている人)がさらに増えた。また、JPCOARでの仕事に対しても全国のリポジトリネットワークへの貢献という意味で一層力を込めて取り組むことができるようになった。また、自館の取り組みや特徴についても、俯瞰して見るできるようになった。
- その場で得られた知識・経験はもちろんのこと、特に人脈構築の点で得るものが多かった。既存の人脈をより強固にし、新たな出会いを得て、それを別の様々な出会い・活動・経験へ派生させていくことができた。著名な講師の方々や、全国から集まった比較的近い年代の職員と交流したことで、これら活動の原動力となるモチベーションが得られた、ということも大きな収穫だった。
- 同じ問題意識を持つ他大学の皆様と同じ場を共有でき、その後のネットワークづくりにもなりました。元々、大学図書館の関係委員会に参加していたのですが、それだけでない繋がりを作ることができたことはよかったです。また、少子高齢化やDX化などの背景を踏まえて企画立案していく必要があるという意識を得ることができました。この点も、今後の業務において活用できる視点だと思えます。
- 全国各地に顔見知りができ、また他大学の方と交流する際にライブラリースキーマや2030デジタル・ライブラリーを共通の話題としてより深く意見交換できるようになった。

- 視野が広がったこと。また人脈の形成について、参加者を対象としたSlackや当時の参加名簿などをもとに「いざというときに連絡を取れる」という感覚はあり、心強く思っています。また、大学図書館職員を対象としたイベントや組織でリトリート参加者に再会することもあり、リトリートへの参加が人脈形成の一助となっていることを感じます。
- リトリート参加をきっかけとした人とのつながりにより、プロジェクト参加や出張等の様々な機会をいただき、自分の興味や視野が広がりました。
- 図書館について考えている多くの若手職員がいることが分かった点。また、そうした職員と顔見知りになれたということ。
- 多くの図書館職員の方とお知り合いになれ、通常業務の中でも相談できる関係性が築けた（電子資料へのアクセス方法の変更の相談）。
- 全国の大学図書館の比較的近い世代の方々と横のネットワークが出来たこと。直接連絡を取り合うわけではなくとも、イベント等への登壇や、報告原稿等を見て、励まされることも増えた

## 自己の視野・興味の広がり

- オンライン研修が盛んな中で、生身で缶詰め合宿を行うのは強烈な体験でした。参加後もアンテナが前より伸びました。
- 仕事に対するワクワクを取り戻せたのが何よりの収穫だと思っています。また個人的には、リトリートをきっかけに1) JPCOARに参加することになった、2) 大学院進学を前向きに考えるようになったのですが、これが人生のターニングポイントになる気がしています。

- 海外の大学において、オープンアクセス化に関してある程度懸念が存在する（学問の自由等の観点で）と知れたこと（ただし、自分が接する関係者の間で、OA化について、そういった学問的、哲学的な視点での検討に触れる機会は無く、義務化にどう対応するか、といった視点のみなので、生かせる場は無い）。
- 全国的に、業界の裾野の広さを改めて感じ、良い刺激になりました。
- （仮に本学・当館の考え方にかすりそうな事象が合った場合の）引き出し・持ち玉の幅は増えたと感じます。
- リトリート参加で他大学の皆さまと交流する機会を得たことで、自らの所属機関について改めて考えなおすことができた点が有意義でした。また、学外で行われている様々な活動を、他人事のように捉えていた部分がありましたが、自分事として考えられるようになりました。
- リトリート参加をきっかけとした人とのつながりにより、プロジェクト参加や出張等の様々な機会をいただき、自分の興味や視野が広がりました【再掲】
- 同じ問題意識を持つ他大学の皆様と同じ場を共有でき、その後のネットワークづくりにもなりました。元々、大学図書館の関係委員会に参加していたのですが、それだけでない繋がりを作ることができたことはよかったです。また、少子高齢化やDX化などの背景を踏まえて企画立案していく必要があるという意識を得ることができました。この点も、今後の業務において活用できる視点だと思います。【再掲】

- 視野が広がったこと。また人脈の形成について、参加者を対象としたSlackや当時の参加名簿などをもとに「いざというときに連絡を取れる」という感覚はあり、心強く思っています。また、大学図書館職員を対象としたイベントや組織でリトリート参加者に再会することもあり、リトリートへの参加が人脈形成の一助となっていることを感じます。【再掲】
- 不確かな将来のことを考えることは難しいが必須のことでもあるので、現在取り組んでいる将来構想に関する議論の中などで直接的に役立っている。また、業務内外を問わず、（現在のところ単発ではあるが）相談や依頼、質問などできる対象が増えたこともありがたかった。【再掲】

### 仲間の発見・交流

- 同世代の人たちがどのようなことを考えていて、どのような仕事・活動をしているのかを知ることができた点
- 日本中の同業者と交流を深められたこと
- 様々な異なる業務経験とアイデアを持つ同業者の方にお会いできたことが有意義でした。規模や国公立/私立の違いを越え利用者のペルソナ像とそれに応えるサービスを模索したことは大きな刺激となりました。
- 自分にはない多様な発想を聞くことができたこと。業務の中でさまざまに企画・提案するときに、リトリートで聞いた意見や発表をヒントにした提案ができたこと。
- 直接今の実務に関係しないことについて時間をとってじっくりと議論する経験が貴重だった。また、多くの優秀な若手職員と接し、意欲的な姿に触れたことが刺激になった。

- 他機関の方々と交流することで、見えていなかった世界が見えて、意識高く過ごせるようになりました。ご挨拶させていただいた方も多く、他の研修でお会いした時にも朗らかにお話できました。古き良き紙の本と、それらを守るデジタルアーカイブや他の先端技術、両方の良さに気づくことができたのもリトリートのおかげです。
- 他大学の方と交流ができたことや、研究者に対する支援のあり方について改めて考えられたことが大変有意義でした。
- 所属機関も(案外)歳も異なる方と大学図書館のもっと楽しい未来を想像して言葉を交わせたことは有意義でした。「働き方改革」の面では悪い例ですが、終業後の公私の境目に、役職によらず集まって話せた頃の熱を惜しむなら、今は自分から関わりに出ていけないといけないはずですね。変わっていないことを感じて悔やみました。
- 全国の方と情報交換する機会を得たので役立っています。
- その場で得られた知識・経験はもちろんのこと、特に人脈構築の点で得るものが多かった。既存の人脈をより強固にし、新たな出会いを得て、それを別の様々な出会い・活動・経験へ派生させていくことができた。著名な講師の方々や、全国から集まった比較的近い年代の職員と交流したことで、これら活動の原動力となるモチベーションが得られた、ということも大きな収穫だった。【再掲】

### 大学図書館に対する再認識・見つめ直し

- 大学図書館の業界的な雰囲気について、実感を持って理解できたこと。

- 元々JPCOARに参加していて全国の知り合いを増やしつつあるところだったが、リトリートをきっかけにJPCOARの内外で知り合い（または一方的に知っている人）がさらに増えた。また、JPCOARでの仕事に対しても全国のリポジトリネットワークへの貢献という意味で一層力を込めて取り組むことができるようになった。また、自館の取り組みや特徴についても、俯瞰して見ることができるようになった。【再掲】

- 他大学の方と交流ができたことや、研究者に対する支援のあり方について改めて考えられたことが大変有意義でした。【再掲】
- リトリート参加で他大学の皆さまと交流する機会を得たことで、自らの所属機関について改めて考えなおすことができた点が有意義でした。また、学外で行われている様々な活動を、他人事のように捉えていた部分がありましたが、自分事として考えられるようになりました。【再掲】
- 他機関の方々と交流することで、見えていなかった世界が見えて、意識高く過ごせるようになりました。ご挨拶させていただいた方も多く、他の研修でお会いした時にも朗らかにお話できました。古き良き紙の本と、それらを守るデジタルアーカイブや他の先端技術、両方の良さに気づくことができたのもリトリートのおかげです。【再掲】

### 大学図書館に関する議論の機会

- コロナで対面での研修の機会がなくなっていたので、同年代の図書館員と密に話し合うという経験が有意義でした。
- 大学図書館の未来について真剣に議論する機会が得られた点。

- オンライン研修が盛んな中で、生身で缶詰め合宿を行うのは強烈な体験でした。参加後もアンテナが前より伸びました。【再掲】
- 直接今の実務に関係しないことについて時間をとってじっくりと議論する経験が貴重だった。また、多くの優秀な若手職員と接し、意欲的な姿に触れたことが刺激になった。【再掲】

### 学内の枠を超えた活動への積極的な関与

- 「大学図書館と文部科学省の若者たちの語り場～大学の未来について語ろう～」に参加したり、「若手図書館員DH勉強会」のメンバーになるなど、所属機関の枠を超えた活動に積極的になりました。特に「語り場」は、リトリートで大学図書館から文科省へ出向している人たちと知り合っていなかったら、参加を見送っていたかもしれないと思うと、ひとつの契機になったと考えています。
- 実際に会って話して顔のわかる人が増えたこと（何かあったときに相談しやすい）。また、リトリートをきっかけに学外の協力組織にも参加することになり、業務の幅が広がったこと。【再掲】
- 元々JPCOARに参加していて全国の知り合いを増やしつつあるところだったが、リトリートをきっかけにJPCOARの内外で知り合い（または一方的に知っている人）がさらに増えた。また、JPCOARでの仕事に対しても全国のリポジトリネットワークへの貢献という意味で一層力を込めて取り組むことができるようになった。また、自館の取り組みや特徴についても、俯瞰して見ることができるようになった。【再掲】

## (3-3) 参加者同士のネットワークで、今後特に相談や意見交換したい事項

### 大学図書館の日常業務・実状や関連トピック

- 学術情報資源（雑誌・電子ジャーナル・データベース等）の契約の在り方
- OAの効果的な広報
- 大学図書館のプレゼンスの高め方
- 研究者・出版社とのつながりの作り方
- ・機関リポジトリの実務的な相談や大学図書館政策に対する大学側の反応など
- ・リトリートでは仮想の状況をもとに話をしましたが、各機関における実際の状況などについて知ることができたら良いと思います。
- ・日常業務のちょっとした困りごとについて他館の事例をお伺いできれば嬉しいな、展示のネタや素材を共有できれば便利だろうな、と思うことはあります。ただこれは湘南リトリート2024の参加者同士だからというのではなく、大学図書館職員のネットワークとしてこういうものがあればいいのにといい気持ちです。
- ・そのときどきの配属先の所掌業務で変わります。また、今日現在は生成AIがブームのようになっておりこのようなそのときどきのホットトピックも相談や意見交換したい事項です。ただ、もっと普遍的に相談や意見交換したいのは、組織の在り方とか、既存業務の持続可能性とか、基礎的かつ基本的なことです。心理的安全性が高まらないと相談や意見交換が始まらないと思いますのでなかなか難しいことですが。

### 将来に向けた取組・行動

- ・新たな図書館像にむけて取り組んでいる業務について意見交換ができればと思う。
- ・リトリートをきっかけに変化した「自身の行動」と「組織の行動」について、ご意見を伺いたいです。
- ・リトリートでの取り組みとは反対に、現時点での各大学図書館等の具体的な状況から、2030年あるいはそれ以降を目指してどのような変化をしていくべきか、日常的に議論・実践・情報交換を行っていききたい。
- ・リトリートで理想を語ったものの、現実問題いきなり大きな変革をすることは難しく、どのように理想に近づけるための行動ができるか相談したい。
- ・リトリートの議論で止めてしまうのは勿体ないので、将来的に業界で目指していく事項についてKGIやKPIの設定まで落とし込み、具体的なアクションにつなげていけるといいなと思っています。

### 具体的な取組事例

- ・2030デジタルライブラリーのロードマップに沿った整理～実装の流れで、各館で取り組んだ具体的な事例があれば共有するなど。
- ・リトリートのグループ発表の中で2030年の大学図書館はAIやメタバースを使うサービスをしていましたが、小さなアイデアや実験的なものでも「つくってみた」「やってみた」を聞きたいですし、自分でも何か話題を出してみたいです。

## オープンサイエンス、生成AI等

- 生成AIをはじめとする最新の技術の活用や弊害についての相談、オープンサイエンスに関すること
- オープンアクセス・オープンサイエンスへの対応や、コンテンツのデジタル化、生成AIについて関心を持っております。



## (3-4) グループディスカッションを踏まえ、ロードマップに盛り込むべき要素や視点等

### 全体

- 「持病や年齢等が原因で、デジタル化に対応できない利用者へのサポート」も、必要になってくるかと考えます。
- 研究者のライフサイクルの観点
- 高等教育へのAIの影響
- 二次著作権（Secondary Publication Right）の規定の新設など、著作権法改正についての視点。
- このロードマップのスコープとして含めにくいかもしれませんが、大学図書館が学術コミュニケーションを担うステークホルダーとして学会等の学術コミュニティとどう関わっていくかという視点が欲しいと思います。
- ご提供できるようなアイデアに至っておらず甚だ僭越ですが、「デジタル・ライブラリー」とは言え、図書館資料における紙とデジタルとの関係性について、方向性を示していただいても良いかもしれません。デジタルに比重を置くことは理解していますが、紙とデジタルの比重の置き方について迷いを感じている図書系職員に出会うことがあります。また、図書系職員の中でも紙重視とデジタル重視で分断を感じるというか、これは果たしてどうなのか、本当は少しでもより多くの図書系職員が同じ方向を向けるようにした方が良いように感じており、既存業務との接続がもう少し見えても良いように感じます。
- 内容に関することではないですが、それぞれの軸の年度ごとの進捗状況が分かれると嬉しいです。（各館レベルの動きにも参考になるとと思いますので）

- グループ毎の検討を経て、将来の利用者（学生）・研究者がどのような状況にあるかを想定する必要があると思いました。そのため、大学図書館側からの視点だけでなく、科学技術政策や高等教育の今後の動向についても俯瞰して考える必要があると思います。この点が不足しているということではないのですが、今後ご検討いただけますと幸いです。
- ロードマップは2030デジタル・ライブラリーを達成するために各図書館がどのように行動するべきかを示したのですが、このロードマップ達成を文部科学省がどのように支援するのかといった計画の発表があると、現場としては心強く思います。特に予算面について、近年は大学に配分される運営費交付金が削減されており、ひいては予算が縮小している（新しいことをはじめづらい）大学図書館も少くないのではと思います。

## 支援機能・サービス

- 特定のツール(学認RDM等)を前提として、それを使うよう呼び掛けたり使い方を教える、というようなやり方ではなく、研究者個別に必要な支援体制を整えること。(データ公開等言えば、その研究者がどんな分野についてどんな手法で研究し、どんなデータをどんな形式で入手および保有し、どんな公開手段が可能か、といった、具体的なニーズを把握した上で支援をすること。画像、測定装置のデータ、聞き取り結果など、個別的・具体的なデータ形式や手法の違いに関する視点が全く重要視されていないことに、ずっと疑問を感じている)(ただし、個別の教員の研究分野に関する知識(学術的な専門知識でなくても、どんなデータ形式を扱いどんな手法を使っているか、といった程度でよいと思われるが、それでも)を図書館職員が持つことが全く期待できない現状では、不可能だと考える)
- 【1】支援機能・サービスについて：ペルソナ設定に関する議論の中では、STEM系と人文系など、研究分野によって利用者の求めるサービスに大きな違いがあることが明らかになりました。特に研究業績となる学術成果物の発信という点では、単著を重視する人文系はコンテンツのデジタル化やオープンアクセスと馴染みにくいという課題があります。そういった既存の学術情報コミュニケーションとオープンサイエンスの潮流とのギャップを分析し、そのギャップを解消するための研究者支援サービスや仕組み作りが必要になると考えます。(例：人文系のOA出版推進施策を調査し、国内の出版者と研究者の仲立ちをする、あるいはリポジトリ等を活用して新たなレーベルを創設する、など)

## 場

- ライブラリ・スキーマの定義について、より明確に示すべき。本来ライブラリ・スキーマは論理構造のみを表現するものであるはずが、発表されている例ではライブラリ・スキーマを活用した例となっている。定義が曖昧であることと規模の大きい大学図書館の活用例のみが公開されていることから、後追いついて作成する各大学図書館で、ライブラリ・スキーマについて間違った捉え方をしている可能性が高い。
- 物理的な場所を越えた「場」の提供にはコンテンツのデジタル化が欠かせませんが、同時に、デジタル化したデータの長期保存という視点は今後より重要になってくると思うところです。
- 自らの班の発表資料内ロードマップでは「支援機能」としてAIを使った検索システムを2028年導入としましたが、生成AIは「場」の部署間連携でより早く導入できると予想します。各部署で作成公開しているWebページのほか、これまで印刷用に作られてきた利用案内や掲示物の原稿をクラウドに集約してAIの情報源にするといったことは、先行事例もありそうです。

## 人材

- 専門人材やURAなどと同じことかもしれないが、館内に教員ないし教員兼職員がいたり、館長（兼図書館担当理事）みたいな職の人を長めに付けられるようにできたら、研究データや分野に特化したことの相談ができたり、他部局（特にULAのいる部署や教員の配置されている情報基盤センターなど）とのやりとりもより対応にできるんじゃないかと思ったりはします。他部局・教員との連携というか、抱き込み？
- 検討課題としては一部挙げられているが、【3】人材「スキル・育成」において、最新の情報科学技術の状況を把握し活用することを念頭に置いた記述は含めておくべきではと思った。技術はあくまで手段であり、また記述せずとも「求められるスキル」として整理されると考えられる一方で、望ましい大学図書館像そのものや他領域のロードマップも情報科学技術の活用が前提として設計されているため、あえて明記して必須のものとしておく（その認識を共有する）方がよいのではないかと思った。デジタル・ライブラリーの実現には図書館という組織や概念の再構築が必要と思われ、そのためには大学の研究支援部門やURA、出版社・学術団体など、様々な組織・団体との協働や、人材の交流が必要なのではないかと思いました。3.人材の項目には、そうした協働についても触れて良いのではないのでしょうか。
- 人材育成について、図書館としての高度化・専門化に比重を置いた構成となっているが、大学図書館が大学組織の一部として貢献し、存在感を発揮するためには、教員との協働や他部署の職員との交流も必要な要素として盛り込むべきではないか。

- デジタル・ライブラリーの実現には図書館という組織や概念の再構築が必要と思われ、そのためには大学の研究支援部門やURA、出版社・学術団体など、様々な組織・団体との協働や、人材の交流が必要なのではないかと思いました。3.人材の項目には、そうした協働についても触れて良いのではないのでしょうか。
- 「人材」について、大学図書館職員の多くは非正規雇用であり、また有期契約雇用の場合も少なくありません。ロードマップの「人材-制度」は専門人材の雇用を主眼に置いて書かれているように見えますが、今いる職員の正規雇用・無期雇用への転換にも目を向けるべきと考えます。数年ごとに職員が入れ替わるせいで知識・経験・スキルの蓄積ができなくなり、長期的な人材育成計画・職員配置の計画が難しくなっているのではないのでしょうか。

### (3-5) その他意見

- 大変有意義な機会をご提供くださいましたこと、改めて、御礼を申し上げます。今回と同じレベルで実施することは難しいかもしれませんが、「続編」も期待しております！
- 改めて準備や運営ありがとうございました。今後長期研修以外だとこのような機会があまりないと思うので、また対面でこういったイベントがあると幸いです。（毎年の図書館総合展がそれに近いのかもしれませんが、旅費と強い（外部的な？）動機がないと地方からはなかなか行けず…）
- さまざまな経歴や環境にある比較的若手の職員が対面し、将来の発展についてディスカッションし集中して成果物を作ることは非常に得難い機会だったと思います。同じフォーマットや毎年の実施でなくても、今後も何らかの形で開催され、後輩が参加する機会を得られることを期待します。
- 湘南リトリートは全国の大学図書館員が集い未来の図書館像を模索するという、非常に貴重な試みでした。同様の取り組みが定期的で開催されるならば、大学図書館界にとって大きな刺激になることと思います。また、研究者や出版者の立場の方もお招きできるとさらに多角的な議論ができるのではないかと感じました。
- このフォローアップアンケートそのものが素晴らしい取組みです。拙い回答内容かもしれませんが恐れ入りますが、喜んで協力させていただきます。
- リトリートに参加したことで、今度の図書館の在り方を検討する館内WGのメンバーに指名されました。
- リトリートをきっかけとして、COAR annual conferenceの運営や、これから委員会ユーザーグループ運営作業部会など、様々な外部の業務に携わることができ、チャンス을 くださった文科省やNIIの方に感謝しております。
- ロードマップの「コンテンツのデジタル化」について、すでにコンテンツの公開に留まらず、東京大学の「デジタル源氏物語」や九州大学の「前近代日本-アジア関係資料デジタルアーカイブ」のように画像とテキストデータの提供まで発展している例もあるので、図書館と研究者の共同により、デジタルアーカイブがより面白くなるのではないかと期待しています。
- リトリートのネットワーク以外にJPCOARやDiscord、カタリバなど様々なコミュニティがあるため、あまり分散しない方がよいかと思いつつネットワークが巨大になると管理が難しくなるので各所から持ち寄ったものを全体の流れにしていくのがよいのかなと思いました。
- 台風の中、葉山に何とかたどり着き、またそこに隔離され、個性的な講師陣が揃っていたからこそ、参加者にはリトリートが強烈に刻み込まれたのではないかと思う。仮に似た内容で別イベントを行うにしても、極限状態を如何に作り出すかが重要ではないだろうか。
- 貴重な機会を頂き、誠にありがとうございました。
- 自分を研修に加えてくださったことに感謝しております。

- リトリートをきっかけに、文科省の人の顔が見えるようになった気がしています。今回のようにイベントの後もフォローアップしてくださったり、関わろうとしてくださっているからだと思いますが、これは業界にとってすごく良い循環を生むと思います。ぜひ様々なアクションにもつなげていきたいですね。引き続きよろしくお願いします！

- 改めて、関係者の皆さまに心より御礼申し上げます。
- リトリートは大変刺激的な経験となりました。運営は大変だったと思いますが、ご企画ありがとうございました。



## IV まとめ

### (1) グループディスカッション

- 2030年の利用者（学生、研究者）を想定して、その時に必要となる大学図書館の機能・サービス等を検討。デジタル・ライブラリーの実現に向けて、各大学の規模や特長を踏まえた大学図書館の将来像等を、それぞれの館で検討する際の参考としていただければ幸い。
- 利用者の背景の多様性を意識したペルソナを設定。今回のケースは一例ではあるが、大学におけるDEI等に関する取組とも呼応して、様々な利用者に対応した「支援機能・サービス」「場」「人材」を検討する必要がある。
- 今後も、新たな技術が大学の教育研究活動に、どのように利活用され、どのように影響を与えているかを引き続き注視する必要。

### (2) フォロアップアンケート調査

- リトリートへの参加により、「自分の視野が広がった」との変化を挙げる参加者がもっとも多く、「自分事としてとらえるようになった」「モチベーションが高まった」「様々な人や組織との連携が必要だ」「情報収集が大事だ」といった意見が多く挙げられた。他方、変化を感じない者や今後の不安を感じるという意見も一部見られた。（Ⅲ．1-1、1-2も参照）
- リトリートは、「人のネットワークを作る／広げる」点で有意義だったと感じる参加者がもっとも多く、そのほか、「自分の視野が広がった」「仲間を見つけ、交流できた」「深い議論ができた」「大学図書館を見つめなおすことができた」「枠を超えた活動に関与するようになった」といった意見が挙げられた。（Ⅲ．1-1も参照）
- リトリートで構築されたネットワークをもとに、今後、日常業務等に関する意見交換をしたいと考えている参加者が一番多く、例として、将来に向けた取り組みや行動に関する意見交換や具体的な取り組み事例の共有、オープンサイエンスや生成AIに関する意見交換が挙げられた。（Ⅲ．1-2も参照）
- ロードマップに盛り込むべき要素・視点については、全体的なもののほか、「支援機能・サービス」「場」「人材」のそれぞれの項目の観点についても意見が挙げられた。

【参考】アンケート質問項目

- ・ 「湘南リトリート2024夏」（以下、「リトリート」という）参加をきっかけとして、他の参加者や、所属機関の内外で新たにコミュニケーションをとるようになった人はいますか。（はい/いいえ）

（はいと答えた場合）それはどのような方ですか。当てはまる人をすべて選んでください。

- リトリート参加者
- リトリート講師陣（有識者）
- 所属組織の他部署の職員
- 所属組織の教員・研究者等
- 外部の職員（リトリート参加者でない）
- 外部の教員・研究者等（リトリート参加者・講師陣でない）
- その他

（はいと答えた場合）それはどのような内容をやりとり（意見交換）していますか。当てはまる内容をすべて選んでください。

- リトリートの内容に関する意見交換・相談：「2030デジタル・ライブラリー」（ロードマップ等含む）
- リトリートの内容に関する意見交換・相談：コンテンツのデジタル化
- リトリートの内容に関する意見交換・相談：オープンアクセス、オープンサイエンス
- リトリートの内容に関する意見交換・相談：ライブラリー・スキーマ
- リトリートの内容に関する意見交換・相談：人材育成やスキル
- リトリートの内容に関する意見交換・相談：大学図書館の今後の利用者像やアクションプラン
- リトリートの内容に関する意見交換・相談：海外の調査報告事例
- リトリートの内容に関する意見交換・相談：AI等の情報技術
- リトリートの内容に関する意見交換・相談：その他
- 業務に関する依頼（例：イベントへの登壇等）
- 業務に関する意見交換・相談・連携協力等
- その他

- ・ リトリート参加後、所属機関内で報告等を実施しましたか。（はい/いいえ）
  - ・ リトリート参加後、前述の報告等の他に自ら企画/行動した事項がありますか。（はい/いいえ）
- （はいと答えた場合）それはどのような内容ですか。

- 大学図書館の関係委員会等への参画（例：JPCOAR）
- 所属機関内での企画の立案（勉強会、説明会等）
- 文献執筆
- 関係資格等の取得（進行中含む）
- 大学等での学修
- 教員や事務職員等との連携協力体制の構築
- その他

- ・ リトリートへ参加したことで、現在までに職員としての意識にどのような変化がありましたか。（自由記述）
- ・ リトリートからおよそ1年経った現在を踏まえて、リトリートに参加して有意義だった点を教えてください。（自由記述）
- ・ 参加者同士のネットワークで、今後特に相談や意見交換したい事項があれば教えてください。（自由記述）
- ・ リトリートでは、ペルソナを設定し、それに基づいて2030年に向けた「デジタル・ライブラリー」の実現もしくはその後の大学図書館の在り方について議論・検討の上プレゼンしていただきました。それを踏まえ、ロードマップに盛り込むべき要素や視点があれば教えてください。（自由記述）
- ・ その他、ご意見があればご記入ください。（自由記述）